

主 題：互いに愛し合うこと

聖書箇所：ヨハネの手紙第一 4章7-12節

皆さん、おはようございます。きょうのテキストIヨハネ4：7-12をお開き下さい。

Iヨハネ4：7-12

4:7 愛する者たち。私たちは、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。

4:8 愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。

4:9 神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。

4:10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。

4:11 愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。

4:12 いまだかつて、だれも神を見た者はありません。もし私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにおられ、神の愛が私たちのうちに全うされるのです。

さて、今朝と来週、私たちは互いに愛し合うということを学んでいきます。皆さんもご存じのとおり、聖書を読めば繰り返しこの命令がなされていることを私たちは見ることができます。例えばイエス・キリストのもとにやってきて、律法の中で大切な戒めは何ですかと聞いてきたパリサイ人に対してイエスはこう答えられました。「『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』これがたいせつな第一の戒めです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。」と、マタイ22：37-39に記されています。

またここだけではなく、十字架に架かる前、弟子たちと最後に過ごした夜、イエスは互いに愛し合うことを教えました。ヨハネ13：34で「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合ひなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合ひなさい。」(新改訳第三版)と言われます。イエスのご自分がこれから十字架に架かり、いなくなることを知っていました。ですから、残された弟子たちがこれから働きを始めて行くに当たって、「愛し合う」ということが鍵になることをイエスはよくわかっていたのです。だから一番最後の教えとして、「互いに愛し合う」という命令を与えたのです。

確かに「互いに愛し合う」ということはとても大切なことです。イエスの時代に言われた真理は今の時代にあっても決して変わっていません。ですから信仰の先駆者たちが歩んだように、兄弟姉妹を、そして私たちの隣人、私たちの周りのすべての人を愛する責任が私たちにはあります。しかし、こう言うと、多くの方は「いや、確かに互いに愛するということが大切です。でも実際にそれを実践することは難しい」と思います。それを実践することは無理ですと。どうして私たちは「互いに愛し合う」ことを難しいと感じるのでしょうか？一つ言えるのは、私たちの周りには私たちが愛を実践することを妨げるような、困難だ、不可能だと思わせるようなことが数多くあるからです。例えば何度言っても脱いだものをほったらかしにするご主人や子どもたち。仕事から帰ってきて物すごく疲れていて、休憩しようとしているのにあれやこれやと言う奥さん。学校の中でも自分が嫌なことや嫌がらせをされたりすることもあります。職場では、自分自身はベストを尽くしていたとしても理不尽に責められたり、また怒られたりします。最も信頼していた友人に裏切られることも私たちは経験します。信頼している人が実は陰で自分のことを悪く言っていたというようなことを私たちは経験することがあります。また、こういったことは職場や家庭、学校だけで経験するものではありません。残念ながら教会の中にあっても同じことが言えます。私はあの人のやり方とは合わない。私はあの人と一緒にいるのはいいけれども、あの人といるのは居心地が悪い。言い出したら切りがないでしょう。なぜこんな人を私が愛さなければいけないのか、こんな人は私が愛する資格もない、そんな愛に値しないと。残念ながら私たちはそんな思いを簡単に抱いてしまいます。

そしてこの世の中にあって、そういったものを経験する人の中にあって、ある人はこう考えるのです。「人生は短いだから、自分と合わない人と過ごすのはやめなさい。人生はあなたから幸せを奪い取るような人と過ごすには短すぎるから」、このようにネットに載っていました。要するに、もし自分と合わない人がいるのであれば、そんな人は放っておいて、自分の合う人、自分が一緒にいて居心地のいい人たちと一緒にいればいい。自分がよく思わない人は自分の生活から引き離してしまえばいい、この世の中はそう教えます。皆さん、ここで何が問題かわかりますか？ここでの問題は、私たちは自分た

ちの物差しで「互いに愛する」ということを測っているということです。私はこの人とは合わない、私はこの人を愛せない、なぜこんな人に私が愛を示さなければいけないのかと。そして悲しいことに、自分には合わない、この人は愛せないと自分の物差しで測った後、私たちはよくそういった人たちから離れてしまいます。どんなところでもこのようなことをすれば悲しみがありますし、問題となるでしょう。しかし、もしこんなことがこの世にあってイエス・キリストのすばらしさを証する教会の中で行われているのであれば、もし私たちが「互いに愛する」ことを行っていないのであれば、それは単に悲劇であるだけではなく、聖書を見ればそれは罪だと教えています。

★ なぜ私たちは愛し合うべきなのか？三つの理由

ですから今朝、私たちが自分自身に問いかけたい質問は、「なぜ私たちは互いを愛し合わなければいけないのか？」ということです。どうして私たちは互いに愛を実践しなければいけないのでしょうか？その三つの理由が今日のテキスト7-12節の中に記されています。ですからどうか私たちの物差しで測る「互いに愛する」ことではなく、神が教える互いへの愛と一緒に考えていきましょう。そしてもしこの中に「互いに愛する」ことに難しさを覚えている人がいるのであれば、兄弟姉妹や家族や友人、隣人を愛するのが困難だと考えている人がいるのであれば、このメッセージが皆さんの励ましになることを、また皆さんがより愛を実践していく者へと変わることを心から願っています。

A. 神を知っている者の当然の応答だから 7-8節

7-8節に一つ目の理由が記されています。「愛する者たち。私たちは、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。」とあります。なぜ私たちが互いに愛し合うのか、その一つ目の理由は愛し合うことが神を知っている者の当然の応答だからです。もう少し別のことばで言うならば、救われている人は必然的に互いに愛し合うのだとヨハネは言います。

さて、それを見ていく前に少し皆さんに覚えていただきたいことは、ヨハネが手紙を書き送った目的は、小アジアにいるクリスチャンたちに、あなたたちは確かに救いを持っているという確証を与えるためだったということです。Iヨハネ5:13に「私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。」と、ヨハネは執筆の目的を書き記しています。でも、なぜヨハネはこの兄弟たちに、あなたたちは確かに永遠の命を持っているという確証を与える必要があったのでしょうか？それは、どの時代もそうですが、当時のクリスチャンたちはさまざまな誤った教えの危険にさらされていたからです。少し戻っていただいて、Iヨハネ2:22にヨハネは「偽り者とは、イエスがキリストであることを否定する者でなくてだれでしょう。御父と御子を否認する者、それが反キリストです。」と記しています。今読んだ箇所が明確に教えることは、この人たちの中にイエス・キリストを否定する者が紛れ込んでいたということです。そしてそれだけではなく、確かに神についてのたくさんの知識を持っていながら、実際救われていないユダヤ人の宗教家と言われる人たちがたくさんいたのです。ですから教会の中を見た時に、自分はクリスチャンだ、自分は神のことをたくさん知っている、自分は正しいと言いながら誤った教えを吹き込もうと、巻き散らそうとする人が紛れ混んでいたのです。そして、そういった人たちによって、自分とあの人の教えは全然違うなあ、あの教えの方が正しいのかなあとか、あの人はたくさんものを信じていて私の持っている信仰とあの人の持っている信仰は違うなあ、自分の信仰は何か欠けているのだろうかとか疑問を抱く危険性があったのです。この兄弟たちは、何が真の信仰であり、何が間違っただけの信仰であるかを理解する必要があったのです。何が正しくて何が間違っているのか——。そのことを知っていたヨハネは危険と隣り合わせにいる兄弟たちを愛したがゆえに、幾つかの確認をするテストをIヨハネの中で繰り返し与えたのです。あなたがもし本当に救われているのであれば、これこれをしているはずだと。そしてきょう私たちが見ようとしているIヨハネ4章もその意図の中で書かれました。あなたたちがもし本当に救われているのであれば、あなたたちは今このようなことを行っているはずだと。

そういった意図のもとヨハネがこれを記したということを入れた上で、もう一度テキストを見てください。7節「愛する者たち。私たちは、互いに愛し合ひましょう。」と、まずヨハネは命じました。ここで「愛し合ひましょう」という現在形の動詞が使われています。ということは、クリスチャンは継続して愛し合わなければいけないということです。愛し合うということは、クリスチャンがやる時があったり、やらない時があったり、そんなものを言っているのではなく、クリスチャンは日々いつも愛し合うという行動をしているのだと言っているのです。愛し合うということを聞いた時に、この時は愛せるけれども、この時は無理ですといった考え方が充満していますが、この「愛し合ひましょう」という命令は、いつできて、いつできないという話をしているのではなく、私たちはいつでも継続して愛し合う者でなければいけないと教えているのです。

ではどうして私たちはいつも愛し合わなければいけないのか——。この7-8節の中でもう一つ大切なことは、クリスチャンの持っている愛は神から来ているものだからということです。大切なことなでもう一度言いますが、クリスチャンの持っている愛は私たちから来るものでもなく、私たちがもともと持っていたものでもなく、神から来るものなのだからということです。ですから、この箇所が言わんとしていることは、本当に救われているのであれば、愛である神から生まれているのであれば、あなたは必ず愛を実践するのだということです。そしてもし救われていないのであれば、あなたが愛である神から生まれていないのであれば、そもそもあなたは愛を知らない。だから愛を実践することはできないのだと言います。子育てをされた方、また教会学校を見ていてもそうだと思いますが、子どもというものは少なからず親の特徴を受け継いで生まれてきます。例えば顔立ちや体型、またあの人の娘さんはお母さんの性格にそっくりだと言ったりします。また私たちは、子どもを通して親がどのような人なのかを知ることができます。この箇所は同じことを教えます。救われた人、神の家族とされた人、神の子どもとされた人、神を「アバ、父」と呼ぶ人、そのようにできるようになった救われた者は親である神の性質を必ず受け継いでいるのです。

パウロもエペソ5：1-2で「ですから、愛されている子どもらしく、神にならう者となりなさい。また、愛のうちに歩みなさい。」と言いました。なぜ私たちが互いを愛し合うのか——。それは神を知っている、神を信じて救われたがゆえに、愛である神から生まれたがゆえに、私たちは神の愛を自分のうちに持っているがゆえに、愛し合うというのは当然の応答であり、あなたのうちにある神の愛があなたたちを互いに愛し合わさせるのだと教えます。ですから、もしこの中に神を自分の救い主として、イエス・キリストを自分の救い主として信じていない方がいるのであれば、互いに愛し合うことは不可能です。互いに愛し合うことはできないのです。なぜならあなたのうちに神の愛がないからです。神を知っている者は互いに愛し合う。それは神が愛であり、その神が私たちのうちにおられるからです。

私たちがいま一度しなければいけないことは、私たちの生き方が互いを愛し合うものであるのか、私たちが互いに愛し合う時に、神の愛が私たちを通して明らかにされているのかと自分に問うことです。そしてもし反映されていないのであれば、もし私たちが互いに愛し合っていると思っていながら神の愛に基づいたものでないのであれば、私は本当に神を知っているのか、私は本当にこの愛の神から生まれたのかと自分自身に問う必要があります。私たちが努力をして愛し合うわけではありません。神が私たちのうちに愛を与えて下さった。もしそれがなければ、私たちは自分の救いをいま一度考えなければいけないのです。そしてもしきょうこの中に偉大な愛の神を知らない方がおられるのなら、きょう知って帰ってください。どうかこのすばらしい愛の神を自分のものとして受け入れてください。

B. イエス・キリストを通して神の愛が明らかにされたから 9-11節

さて、私たちがなぜ互いに愛し合うのか、二つ目の理由はイエス・キリストを通して神の愛が明らかにされたからです。そのことが9-11節に「神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」と記されています。

◎ 神の愛の三つの特徴

神はイエス・キリストを通して神の愛を明らかにされた。ではどんな愛をイエスは明らかにされたのでしょうか。9-10節の中にキリストに現された神の愛の三つの特徴を見ることができます。

a) 神の愛は主導的なもの 9a、10a節

9節を見ると、神の愛は主導的なものであると言えます。9節「神はそのひとり子を世に遣わし、」とあります。ヨハネ3：16も「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。」と始まっています。ここに記されているすばらしいニュース、それはだれでもない神ご自身がひとり子を世に送ってくださったということです。ですから言い換えれば、私たちが何かをしたからではなく、神が率先して行動を起こしてくださったのだということです。ヨハネは10節の中でこのことをもっとわかりやすく記しています。Iヨハネ4：10「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」と。以前から私たちの中に神を愛する、そういう思いがずっと備わっていたのかということとそんなことはありません。私たちは、そもそも生まれた時からずっと神を愛することができなかつたのです。神の栄光を現すために造られ、神を愛して生きていくようにと造られたにもかかわらず、むしろ神に逆らい、神が憎まれることを選択して生きてきたのです。そんな中であって、神が私たちを愛して下さって、神みずから私たちを救うために神のひとり子を与えてくださったのです。

ローマ5：8の中に「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださった

ことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」とあります。私たちがまだ罪人であった時、私たちがまだ神に反抗していた時、私たちがまだ神の敵であった時に、キリストは私たちの罪のために死んでくださった。そのことを見た時、神の愛というのは何かの条件によって左右されるものではないのです。自分にとって都合がいいから愛するとか、私はあの人のことが気に入っているから愛しましょうとか、相手がどんな人であれ、状況がどんなであれ、神の愛というのはみずから率先して示していくものであり、神の愛というものはご自身が主導的に行われるものなのです。決して何かによって左右されることがない。たとえどんなに愛することが難しい状況であっても私たちは率先して愛していく、それが神の愛なのだということがまず一つ目に言えます。

b) 神の愛は最も必要なものを与えるもの 9b節

そして神の愛の二つ目の特徴は、神の愛は最も必要なものを与えるものだというのを私たちは9節の中で見ることができます。「その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。」と。パウロはキリストを知る以前の私たちがどのような状況にあったのかということ、エペソ2：1で「あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって」と記しました。私たちは「死んでいた」。余り死んでいる人を見かけることはないと思いますが、私たちが幾ら語りかけようが、手を握ったり、何をしても結局死んでいる者は反応することがないのです。ここでパウロが言っている「死んでいる」というのは、肉体的な話ではなく、霊的にということですが、霊的に死んでいた私たちは神に対して決して反応することができなかつた。今となつては私たちの目にはすばらしい救いのメッセージ、本当にすばらしい、感謝です、神様と。でも私たちが死んでいた時には、私たちの前に幾ら福音を伝える人が現れたとしても、福音を目の前にぶら下げられたとしても、私たちに見えなかつたのです。私たちが今では心から喜ばせるようなすばらしいニュースも、私たちが死んで耳が聞こえないがゆえに、価値がなかつたのです。ですから、私たちがイエスを知る以前の状態というのは無力で希望がなかつたのです。そんな希望もない私たちに神がイエス・キリストを通していのちを与えてくださった。

先ほどのエペソの続き2：4-5に「しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。——」とあります。私たちはそっちに行つてはいけなかつた、そっちは滅びに向かっていると警告されているにもかかわらず、死んでいたがゆえにそれに反応することはできなかつたのです。私たちはこつちが正しい道なのだと思つて歩いてきたのです。たとえどんなに周りの人にこつちはだめだ、そっちへ行つてはだめだと言われたとしても私たちは反応することができなかつた。しかし、そんな希望もなかつた私たちに私たちが最も必要としていたもの——いのちをを神は与えてくださったのです。

c) 神の愛は犠牲を伴うもの 10b節

そして三つ目、神の愛は犠牲を伴うものです。10節に「なだめの供え物」ということばが出てきます。私たちが聖書を最初から最後までを見た時に、最も大切で、最もよく議論される質問は、どうして聖く完全に正しい神が人の罪を赦すことができたのかというものです。聖書を見れば、私たちは罪また罪人に対して神が怒っておられる様子を見ることができます。例えば、ローマ1：18に「**というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。**」と記されています。神は罪人に対して、罪に対して非常に怒っておられると。でもそれだけではないのです。聖書が教えることは、神が完全に聖いお方であるから、必ずその罪をさばかなければいけない、絶対に罪を見逃すことができないということです。ある人は「なぜ？神様というのは愛のお方でしょう？」と言うかもしれませんが。罪を見過ごしたらいいのではないかと。もしそういう人がいるのであれば、少し考えてみてください。例えばあなたの愛している家族が全員何者かに殺された。そしてその犯人が捕まって、その犯人が受ける裁判の席にあなたも座っているとします。その時にもし裁判官が「私は優しくしてこの犯人がかわいそうだから何の罰もなく釈放しましょう」と言ったとしたら、私たちは一体どうするでしょう。私たちはそれに対してOK、それは大丈夫というふうには絶対に言えません。私たちはちょっと待って、法に基づいて正しくさばいてくれと、正義をなしてくれと、正義が必ずなされなければいけないのだと主張することでしょう。そこで問題なのは、私たちが神の前に同じ存在だということです。私たちは神の前に誰ひとり例外なく罪人です。全人類は聖い神の前に罪を犯し、神の法を破つたのです。神は完全なる義であるお方で、聖いお方であるからこそ、絶対にその間違いを赦すことができない。完全にその罪を、間違つたことに対して正義が成し遂げられなければいけないと。そしてもしその正義が成し遂げられるのであれば、ここにいる私たちひとりひとり誰ひとりとして言い訳も逃れることもできません。

私たちにあって大きな問題は、私たちが罪を持っていることです。そしてその罪を神は決して見逃すことはありません。神の義が満たされ、その怒りがなだめられることが必要だつたのです。イエス・キ

リストはその怒りをなだめる供え物として十字架に架られました。本来私たちが受けるべき罰やさばきを神のひとり子であるイエス・キリストは代わりに十字架の上で受けてくださったのです。きょうのテキストと同じIヨハネ3：16ではこう言っています。「キリストは、私たちのために、ご自分のいのちを捨ててになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。」と。神が私たちの代わりに死んでくださったのだという福音の話聞いた時に、私たちの心には一体どんな思いが浮かぶでしょうか？私たちが気づかなければいけないのは、私たちが何かをしたからではなく、決して私たちがそれに値したわけでもないということです。神のひとり子イエス・キリストが私たちのためにいのちを捨てなければいけなかったのだと。私たちはいつもこのことを当然と思ってはいけません。神はいのちを犠牲にしてまで私たちのことを愛してくださいましたのです。神の愛、それは犠牲を伴う愛だと、私たちは言うことができるのです。

◎ 私たちの責任

さて、こんな愛を私たちに示してくださいました神に対する私たちの責任というものは一体何でしょう？そのことを私たちは11節の中で見ることができます。「愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださいましたのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。」と続きます。皆さん、気づかれたかもしれませんが、ヨハネは7節で「互いに愛し合いましょ。」と言い、11節では「互いに愛し合うべきです」と言葉を変えました。この違いは、「互いに愛し合う」というのは、いかんせん愛というのは私たちがしたい、したくないにかかわらず私たちひとりひとりに課された義務なのだということとここでヨハネは言うのです。私たちに選択権があるわけではない。「神がこれほどまでに私たちを愛してくださいましたのなら」、その神の愛を実践することは最早私たちにとって義務なのだということと。人ではなく神の定義にあって「互いに愛し合う」ということは、どんな相手であろうが、どんな状況であろうが、そんなものは一切関係なく、イエスが愛したように私たちも愛することなのだ、それが神が教える互いに愛し合うということなのです。

問題は私たちの生き方がどんなものなのかです。あなたはどんな相手でも、どんなに自分が好ましくないような状況にあったとしても、この人にはどうしても優しくしてあげられない、この人にはどうしても愛を示すことができないと、もしあなたがそのような状況に置かれていたとしても、みずから率先して互いに愛し合うことを行っているのでしょうか？それとも自分はまあいいや、相手が来たらしようと受け身になっていないのでしょうか。またあなたは私たちが相手が最も必要としているものを満たそうという思いを持って互いを愛しているのでしょうか。Iヨハネ3：17-18に「世の富を持ちながら、兄弟が困っているのを見て、あわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょう。子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行ないと真実をもって愛そうではありませんか。」とヨハネが記しています。私たちは単に愛していますというようなことばを言えと求められているわけではありません。私たちは兄弟が困っているのを見て、兄弟が必要を覚えているのを見て、そのことに対して喜んで愛を示そうとしているのでしょうか？また私たちは兄弟が罪を犯しているのを見て、そのことに関して我関せずになっていないのでしょうか？勘違いして間違っただけではないのは、愛することとは罪を無視するというものではありません。もし私たちが罪を無視するのであれば、それは愛ではないのです。なぜならば私たちは皆罪を犯すのです。私たちは皆過ちを犯すのです。問題は、そこからどのようにして主に喜ばれる者へと変わるのかということです。もしあなたが兄弟が犯している罪を見て、何もしない、何も言わないのであれば、それはその兄弟が成長する機会を削いでいることになるのです。

私はこの人とは合わない、この兄弟とは合わない。だから私は放っておこうと、私たちは距離を取っていないのでしょうか。また何より私たちの周りにまだ救いを必要としている人がいるにもかかわらず、その人が最も必要とする福音のメッセージを私たちが持っているがその人たちに語ることをしない。私たちはそのようなことになっていないのでしょうか。私たちが持っているこのすばらしいニュースを最も必要としている人に私も伝えていきたい、私も愛を示していきたいと熱心にメッセージを伝えているのでしょうか。

そして最後に、私たちは犠牲を払って互いに愛し合っているのでしょうか？ある人を愛するには時間がかかるかもしれませんが。自分の思いどおりにはならないかもしれませんが。こうやってほしい、でもそれをそのとおりにはやらないかもしれません。もしくは私たちの感情を犠牲にしないといけませんか。もしかしたら私たちはお金を犠牲にしないといけませんか。私たちはエネルギーを犠牲にしないといけませんか。たとえどんなものが犠牲になったとしても、私たちは互いに愛し合おうとしているのでしょうか。神が犠牲をもって私たちを愛してくださいましたことを知っていながら、この犠牲は私は払えないとなっていないのでしょうか。私たちには愛し合うという責任があるのだとヨハネは教えるのです。

C. 私たちが愛し合うことを通して神が明らかにされるから 12節

そして最後に、私たちが互いに愛し合う三つ目の理由は、私たちが愛し合うことを通して神が明らかにされるためです。12節に「いまだかつて、だれも神を見た者はありません。もし私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにおられ、神の愛が私たちのうちに全うされるのです。」と書いてあります。私たちが知っていることは、神は霊だということです。イエスはヨハネ4：24で「神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。」と言っています。そして霊であるがゆえに私たちは誰ひとりとして神を見たことがないのだとパウロも1テモテ6：16の中で「ただひとり死のない方であり、近づくこともできない光の中に住まれ、人間がだれひとり見たことのない、また見ることもできない方です。誉れと、とこしえの主権は神のものです。アーメン。」と言っています。誰ひとり神を見たことがないけれども、私たちが神を見る方法がある。この世の中にあって私たちは神を証することができるというのです。私たちを通して神を見ることができると。私たちが互いに愛し合うことによって、それが可能なのだということ、私たちがみことばから見ることができます。これは決して“勧め”ではありません。こうしたらいいよと神が言っているのではありません。私たちは互いに愛し合う責任があるのです。

◎ まとめ

さて、ここまで互いに愛し合わなければいけない三つの理由を見てきました。確かに大切なことだとはわかってはいるけれども、それは難しいと思われているかもしれません。確かに互いに愛し合うということは難しいことです。でも先ほど言ったように、私たちはこの互いに愛し合うということを命令として受けているのです。ですから神から言われているがゆえにそれをするのだと。でもそれは確かに難しい。どうしたら私たちは互いを愛し合うために成長することができるのだろうか、どのようにしたら私たちは互いに愛し合う者へと変わっていくことができるのだろうかと思われた方、私たちにできることが幾つかあります。

① 愛が増し加わるように祈る

まず私たちは祈ることができます。私たちは互いに愛し合うことができるように、まず神の前に祈る必要があるのです。パウロも同じように祈っている様子が1テサロニケ3：12の中に記されています。「また、私たちがあなたがたを愛しているように、あなたがたの互いの間の愛を、またすべての人に対する愛を増させ、満ちあふれさせてくださいますように。」と書いてあります。パウロも愛が増し加わるように祈り続けていたのです。私たちも同じことです。私たちも私たちの愛が増し加わりますようにと、私たちの神に対する愛が、そして兄弟姉妹、隣人に対する愛がより増し加わるようにと祈らなければいけないのです。神の助けをいただくことが必要なのです。

② キリストの例を覚える

また、祈るだけではなく、私たちはイエス・キリストの例を覚えることもできます。福音書を読めば、イエス・キリストが弟子たちとともに過ごした様子を見ることができます。その中を読んでいて、皆さんもフラストレーションがたまったことがあるかもしれませんが、私たちは数々の場所でいつまでたっても成長しない弟子たちを見ることができます。例えばピリポはヨハネ14：7-8でこういう会話をしています。イエスが、わたしを知っていたなら父を知っており、すでに父を見たのだと言った、そのすぐ後「主よ。私たちに父を見せてください。」と言うのです。ピリポさん、話、聞いてますか？と突っ込みたくなるようなことがあります。今、わたしを知っているなら父を見たと言われたところなのに、なぜ父を見せてくださいと頼むのでしょうか。ピリポだけではなくペテロもそうです。ペテロは自分はあなたのためにはいのちを捨てる、あなたのことは絶対に裏切らないとイエスに約束しました。どうなったかと言うと、三度イエスを知らないと言いました。弟子たちだけではありません。十字架にイエスが架かった時に十字架の周りにはイエスのことを嘲ったり、イエスにつばをかけた、イエスを罵ったり、自分を処刑しようとしていた人たちに囲まれていました。そんな人たちに対してイエスはこう祈ったのです。ルカ23：34に「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」と書いてあります。福音書の中を見れば、人間的に見ればイエス・キリストはいつ切れて、こんな弟子とはやってられないと、こんな弟子は私には要らないからもっと別の弟子を探すこともできたかもしれませんが、十字架に架かっている中であって、十字架から降りてそこにいる人全員を滅ぼすことも神はできたのです。しかし、イエスはそんなに全然成長しない弟子たちを、自分のことを処刑しようとしている人たちに対してさえも愛を示されたのです。どんな人に対してもイエスは率先してその人の必要を満たし、犠牲をいとわなかったのです。

そのことを聞いてある人はこう言うかもしれません。いや、それはイエス・キリストだからできたことですよ、それは神だからできたことですよ。私たちがきょう見たことから言えるのは、その神の愛があなたのうちにあるのだということです。イエス・キリストの愛した愛が私たちのうちにあるので

す。同じ神の愛を私たちは持っているのですから、私たちは言い訳することができないのです。確かに難しさはありますし、確かに私たちは失敗をしたりするでしょう。しかしそれは私たちの責任から逃れる理由にはならないのです。救われているのであれば、神の愛があなたのうちにあるのです。ですから、私たちはイエスがどのようにして人々を愛されたのか、そしてその模範にならっていくことが大切です。

③ 神があなたに示された愛を覚え続ける

そして最後に、私たちはキリストを通して神があなたに示された愛をいつも覚え続けることです。キリストが私のために何をしてくださったのか——。どこかの誰かの罪がイエスを十字架につけたわけではないのです。私の罪が十字架につけたのです。でもその罪を神は赦してくださった。ですから神を、互いを最も愛する人は自分がどれほど赦され、愛されたのかを感謝している人だと言えるのです。主はどうしてもなかった私たちをいのちをもって、犠牲を通して明らかにしてくださった。そして感謝なことに、その神の愛が私たちのうちに今あるのです。今、神は私たちを愛してくださっているのだと。こんなすばらしい愛で私たちは今愛されているのだと。そのことを知っている私たちの責任はともに互いに愛し合うことを学び、そのことを実践し続けることです。ですからどうかもう一度互いに愛するということがどういうことなのか、そのことをよく考えてみてください。そしてそのことをともに実践する者へと変わっていきましょう。